

教員の総合業績(基礎資料)調査 氏名 (花田 光彦)

1 研究業績

1) 著書・論文・学会発表・作品など (平成 12-18 年度に限る)

例: (欧文の場合は、原文 **alphabet** で記入してください)

全著者あるいは作者名 (自己にアンダーライン、単著の場合はアンダーライン不要)

& 著書、学術論文又は作品の名称

\$ 発行所 (総頁数)、発表雑誌又は発表学会 (号・巻・pp・年月)、展覧会 (場所・期間) などの名称

さらに、特別講演・シンポジウム (招待講演)・一般講演など (地方支部会・全国大会・国際会議) の別

註: 学会・展覧会など、専門分野以外の人に分りにくい場合は、できるだけその社会的位置づけ、歴史、規模などの簡潔な説明を付してください

(論文)

Hanada, M. (2004). Effects of the noise level on induced motion. *Vision Research*, 44 (15), 1757-1763.

Hanada, M. (2005). Phenomenal regression to the frontal and natural picture. *Vision Research*, 45 (22), 2895-2909.

Hanada, M. (2005). Computational analyses for illusory transformations in the optic flow field and heading perception in the presence of moving objects. *Vision Research*, 45 (6), 749-758.

Hanada, M. (2005). An algorithmic model of heading perception. *Biological Cybernetics*, 92 (1), 8-20.

Hanada, M. (2006). Effects of circular motion on judgment of rotation direction and depth order in visual motion. *Japanese Psychological Research*, 47(4), 251-261.

(発表: 国内学会)

花田光彦 (2004) 視覚的運動からの自己進行方向知覚の個人差, 日本基礎心理学会第 23 回大会.

花田光彦 (2005) 傾いた絵画における表情の知覚, 日本視覚学会 2005 年冬季大会.

花田光彦 (2007) コントラストとノイズが運動同化・対比へ与える影響, 日本視覚学会 2007 年冬季大会.

2) 学会活動 (役員・会員)、学会の組織運営、学会誌の編集委員など (平成 12-18 年度に限る)

例:

学会などの名称

& 編集委員長又は委員などの別

\$ 任務期間（年月）

註：専門分野によっては適宜変更（例えば、学会を展覧会などと記す）・追加説明を付してください できれば展覧会・学会などについても社会的位置付け、歴史、規模などの簡潔な説明を添えてください

日本視覚学会会員
関西心理学会会員
日本心理学会会員
日本基礎心理学会会員
Optical Society of America 会員

3) 研究費獲得状況（未来大学外からの財源）（科学研究費、財団助成金、委任経理金など
（平成 12-18 年度に限る）

例：

平成 12-(13)年度

& 財源、たとえば科学研究費補助金

\$ 研究課題名

% 代表者、分担者の別、研究課題参加者数、あるいは〇〇研究所との共同研究（相手機関の協同研究者数など）

¥ 研究経費（例：平成 12 年度；800 千円、平成 13 年度；500 千円）

平成 16-18 年度 科学研究費補助金若手研究(B) 運動視特性の情報理論的解析（代表者、分担者なし， 2,100 千円(平成 16 年度)， 800 千円(平成 17 年度)， 800 千円(平成 18 年度))

4) その他（特許、内地研究（学内共同研究は除外）および在外研究歴と成果など特記すべきこと。本項目は平成 12-17 年度に限定しない。）

2 教育業績

1) 教育負担の実態（複数教員で担当する科目の場合は、貴方の分担分のみ）本項目は時間割に含まれた教科（補講・補習など教室で行なったものは含む）を調査の対象としております。従って、〇〇研究会、〇〇同好会など、各教員室他で行なったものは、対象外とします。試験やレポートなどの採点時間も除外します。（平成 12-18 年度に限る）

例：

科目名（講義・演習・実習・補講の別）、単位数・必修/選択の別、担当教員数（単独の場合は不要）

& 実施期間（平成 12 年度前期、あるいは平成 13 年 10-11 月）、実施コマ数（休講しても補講で補えば算定する）、補講をしなかった休講回数（例：実施 13 コマ、休講 2 コマ）

\$ 実働時間数（全て、実時間合計(推定)値をお願いします）、演習などは一コマ 1.5 時間を超えていると思われるので、そのような場合は、たとえば一コマ 2.2 時間などと算定してください（例：実働 22.5 時間）

% 受講登録学生数（例：45 名）、平均的出席者数（例：38 名；初めは 40 名、終りは 25 名など）、単位認定（合格）者数

註：本項目はできるだけ正確にお願いしたいですが、概数でも結構です 記述がない場合は 0 と判断します

心理学（講義） 2 単位 教養基礎科目担当教員 1 名

平成 17 年度後期 実施 14 コマ、休講 1 コマ、登録 179 名、出席 143 名、合格 135 名

平成 18 年度後期 実施 14 コマ、登録 126 名、出席 93 名、合格 89 名

認知科学（講義） 2 単位 教養基礎科目 担当教員 6-8 名

平成 17 年度前期 実施 14 コマ(担当 3 コマ)、登録 125 名、出席 110 名、合格 94 名

平成 18 年度前期 実施 14 コマ(担当 2 コマ)、登録 139 名、出席 123 名、合格 120 名

認知心理学（講義） 2 単位 専門必修科目 担当教員 5 名

平成 16 年度前期 14×2 コマ(担当 4×2 コマ程度) 登録 172 名、出席 170 名、合格 168 名

平成 17 年度前期 14×2 コマ(担当 4×2 コマ程度) 登録 175 名、出席 167 名、合格 167 名

平成 18 年度後期 14×2 コマ(担当 5×2 コマ程度) 登録 172 名、出席 168 名、合格 163 名

認知心理学演習（演習） 2 単位 専門必修科目担当教員 5 名

平成 16 年度前期 14×2 コマ(担当 4×2 コマ程度) 登録 173 名、出席 171 名、合格 171 名

平成 17 年度前期 14×2 コマ(担当 4×2 コマ程度) 登録 174 名、出席 161 名、合格 161 名

平成 18 年度後期 14×2 コマ(担当 4×2 コマ程度) 登録 170 名、出席 170 名、合格 163 名

ヒューマンインタフェース（講義） 2 単位 専門必修科目 担当教員 5 名

平成 16 年度前期 14×2 コマ(担当 2×2 コマ) 登録 236 名、合格 208 名

ヒューマンインタフェース演習（講義） 2 単位 専門必修科目 担当教員 5 名

平成 16 年度前期 14×2 コマ(担当 2×2 コマ) 登録 228 名、合格 195 名

認知システム特論 2 単位 大学院講義

平成 18 年度前期 実施 14 コマ 登録 13 名、出席 12 名、合格 12 名

2) 成績評価方法 (その方法を具体的に記載・学生 (社会) が納得するような具体的説明。) また、複数の教員で担当する科目の場合は、取りまとめの方法についても記述してください。

ヒューマンインタフェース

講義の成績評価：出席点 (出席 100% で 50 点満点, ただし欠席 5 回を超えると失格) と期末試験 (5 名の教員が 1 題ずつ 50 点満点) の合計。

演習の成績評価：毎回提出したレポート (100 点満点) の合計点を全回数の 14 で割った点数。

認知心理学

講義の成績評価：出席が 2/3 より少ないものは失格。期末試験の結果。

演習の成績評価：出席が 2/3 より少ないものは失格。レポートの平均。

心理学

出席が 2/3 より少ないものは失格。期末試験とレポートの結果の合計。(心理学実験の参加が単位の必要要件(平成 17 年度のみ).)

認知科学

出席が 2/3 より少ないものは失格。期末試験 (平成 17 年度)、または、レポート (平成 18 年度) の結果。

3) 講義方法など改善への努力 (FD 関連の講演会などの聴講回数、教育内容とそれらの効果について貴方が行われた事柄・目標を具体的に記述して下さい)。

ヒューマンインタフェース, ヒューマンインタフェース演習

講義では理解するのが難しい内容を, 演習での課題を行うことで理解の向上をはかった。よいインターフェース, 悪いインターフェースの例を多く紹介することで, 具体的なイメージをつかめるように努力した。

認知心理学, 認知心理学演習

講義では心理統計学を含めた方法論を中心に, 演習では基礎的知識, 技能の習得を中心に行

い、実際に基礎的な心理学実験を実施できるようになるよう心がけた。また、演習ではレポートを提出し、添削することにより基本的な科学的報告書の書き方を学んでもらった。

4) その他(上記以外に特記すべきことがありましたら、簡潔かつ具体的に、箇条書きなどで記述してください。特に、貴方が作られたシラバスと現在教務委員会で検討されている(コース別)講義内容・目標、あるいは JABEE などとの関連、並びに貴方が担当されている科目の位置付けなどについてご意見があれば記して下さい。また、本学は教員の専門分野が多岐にわたっているため、相互理解を目的としたコース特有の問題点や、皆さんの教育に対する抱負などを記述して戴いても結構です。)

ヒューマンインタフェースは学際的な分野であり、異分野の 5 人の教官が協力することで、分野間を有機的に統合した内容が学ぶことができるように努めた。

心理学では、実験例などを紹介しながら、講義の内容が具体的なものから理解できるように勤めた。認知科学では、デモなどを用いて、体験しながら学べるように配慮した。

3 大学の管理運営

各種委員会(委員長・委員、クラス担任、学習指導・生活指導、クラブ活動の顧問等の実績(具体的に記述してください、できれば実働延べ時間数など))、その他。(平成 12-18 年度に限る)

委員会

- 人権・実験倫理委員会委員(平成 16, 17 年度)
- 情報ライブラリ委員会委員(平成 16 後期, 17 年度)
- システム委員会委員(平成 18 年度)
- 教務委員会委員(平成 18 年度)

クラス担任

- 1 年 J クラス(平成 16 年度), 2 年 J クラス(平成 17 年度)
- 1 年 H クラス(平成 18 年度)

4 その他

資格(技術士など)、地域への貢献(地域自治体審議会、委員会等の役員、委員。地域との共同研究・技術相談。公開講座・出前授業・市民向け講演)あるいは提言・御意見など。(平成 12-18 年度に限る)

平成17年度:オープンキャンパス模擬講義